
陰陽少女 2

水原 順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽少女2

【Zコード】

Z4990Z

【作者名】

水原 順

【あらすじ】

主人公・八神愛子^{やがみ あいこ}は、御神楽小学校に通う、五年生の女の子。八神神社の巫女で、霊能力者である。業界では名の知れた霊能者の両親が全國からの色々な儀式やお祓いの依頼で飛び廻っている間、八神神社を守つて奮闘するお話の第2弾

人面腫
じんめんしゅ

その少女は、中学校の校舎の屋上で、強い風に吹かれながら、夕暮れの街を見ていた。

ショート・カットの髪。その短い髪と、制服のスカートを、風になびかせている。着ている制服は、この中学校のものではない。

右手に、四十?ほどの、銀色の杖を持つている。杖は、夕日に照らされて、オレンジ色に輝いている。取手の先に、これも銀色の輪の束が、付いている。風が強く吹くと、その輪の束がサラン、と澄んだ音で鳴った。

土曜日。今、グラウンドで後片付けをしている、野球部員たちが帰つてしまつと、校内に残つているのは、その少女だけになつてしまふ。

五時になる前に、野球部員たちは、引き上げていつた。東の空には、星が見え始め、西の空では、粘つてゐる春の夕日が、雲を真つ赤に焦がし、空の三分の一ほどを、オレンジ色に染めていた。

屋上の鉄のドアが、キイッと音を立てて開いた。少女は、気付かないのか、校庭の向こうに広がる街を見たまま、振り向こうとしなかつた。

ドアから、一人の男が姿を現した。

年齢は、五十歳くらいに見える。黒く、硬そうな髪。眉は、濃い。細身で、切れ長の眼。紺色のスラックスに、白いポロシャツを着ていた。

少女に向かつて、ゆっくりと歩を進め、5mほどの距離で立ち止まつた。

少女は、ゆっくりと振り向き、男と向かい合つた。口元に、微かに笑みを浮かべてゐる。

「まさか、君みたいな子供とは、思わなかつたよ。かなりの、靈能力者なんだね」

少女は、返事をしなかつた。代わりに、銀の杖の輪の束が、ラサ

ンと鳴つた。その杖を見て、男の顔が強張つた。

「その杖は、『銀角』。まさか、あなたが、あの天海法師なのです

か？」

男の口調が、目上の人間にに対するものになつていた。

「自分で、そう名乗つたわけじゃ、ないんだけどね。そう呼ばれてるわ」

少女は、制服のポケットから、紙飛行機を取り出した。紙飛行機は、和紙で出来ており、筆で文字が書かれてあつた。

「平和的な、返し矢つてこな。こんなものであたしを呼び出して、どうするつもりだつたの？」

「もちろん、平和的に話をするためです。あの子の呪いを、解いてやつてもらえませんか？」

「あたしには、呪いを掛けるほど、恨んでいるひとなんて、いないわ。誰のことだか分からぬけど、その子に、誰かに恨まれる心当たりが無いか、聞いてみれば？」

少女は、明らかにとぼけている事を、隠そつとしていいない。『自分がやつた』と、言つたようなものだ。

「誰がその子を恨んでいようと、術を掛けたのは、あなたでしょう？それを、なんとかしていただくわけには、いきませんか」

男は、泣きつくような口調で、言つた。

「あたしは、方法を教えただけよ。実際に本気で恨んでないと、術の効果なんて続かないでしょ？」

「じゃあ、教えてくれませんか。一体、誰がそんなにあの子を恨んでいるのですか？」

「自分で、なんとかするのね。それが、あなたの仕事なんでしょう？」

男の目に、一瞬怒りの感情がのぞいたが、少女と眼が合つと、す

ぐにあきらめの色に変わった。

「あなたを雇つた人、お金持ちなんでしょう？もつと、一流の靈能者に頼むように言えば？あなたじゃ、無理よ。アレをなんとかするのも、あたしに痛い目をみせるのも」

日は、完全に落ちたが、屋上は漏れてくる街明かりと、いつの間にか空に浮かんでいた月明かりで、薄明るい。

少女は、右手に持つた杖を、頭上に上げた。杖は、月明かりを吸つて、銀色に光つていて。杖の輪の束が、サランと鳴つた。風が、ピタリと止んだ。

男が一瞬、身構えた。

ふわり、と少女が宙に浮かんだ。

「いい？ 一流の、靈能者よ。この、天海法師と、張り合えるほどね」

少女は、クスクスと笑うと、さらにもう、手の届く高さではない。そして少女は、まるで風に流されるようご、屋上から離れ、ふわりふわりと、夜の街の方へゅつくりと飛んでいった。「まつてくれ！いや、待ってください！話は、まだ終わつてない！」

男は、思わず駆け寄り、屋上を囲んだ金網に、すがりついた。夜空に消えてしまつた少女の、クスクスという笑い声が、いつまでも屋上に響いていた。

男は、ヒザを着き、頭をかかえ、しばらくその場にうずくまつていたが、やがて立ち上ると、ふらふらと、病人のよくな足取りで屋上の扉を開けた。

男が、屋上から姿を消したあと、屋上の階段室の陰から、夜空に消えたはずの少女が、姿を現した。

少女が、杖をちょっと振つた。サラン、と澄んだ音が、屋上に響いた。

男は、「佐島」と名乗つた。五十歳くらいだりつて、愛子は思つた。靈能力者の臭いがする。

大人としては、瘦せて小柄だが、小学五年生の中でも、飛び切りチビの愛子から見ると、当然大きい。

学校の帰り道、八神神社へ上る階段の下で、佐島と一緒になったのだ。二人は、並んだまま、無言で階段を上り始め、鳥居をくぐつて境内に入つたとき、男が声を掛けてきたのだ。

「君、こここの子かい？」

「え？ はい、そうですけど」

ランドセルを背負つたまま、愛子は少し身構えた。

「ハハ、そう怖がらないで欲しいな」

佐島は、笑つて言つた。そしてその後で、名乗つたのだ。

あまり、人相の良い顔とは言えない。黒くて、硬そうな髪を刈上げ、真ん中で分けている。濃い眉。切れ長の眼。細く鋭い印象の顔つきだ。薄手の茶色のセーターに、綿パンを履いている。

「ハ神舞子と言つう人を、訪ねて來たんだがね。今、いらっしゃるかな？」

愛子が、学校を出たのが、四時過ぎだつた。放課後、運動場でクラスの友達と遊んできたのだ。

「居ると思いますよ」

愛子は、心の警戒を緩めてはいなかつた。しかし、舞子に敵う程の能力者でもなさそうだと思い、取り次ぐ気になつたのだ。

「じゃあ、こつちへ来て下さい」

愛子は、佐島を母屋へ連れて行かず、神殿の方へ案内した。

神殿を、正面から見ると、大きな鈴と太い繩がぶら下がつており、木の柵の向こうに大きな賽銭箱さいせんばこが置かれている。その向こうに、二十畳程の畳敷きの間があり、突き当たりの壁に、祭壇がある。

神殿の中へは、建物の横の扉から入るようになつていた。愛子は、ポケットから鍵の束を取り出すと、その中の一つを選び出し、扉の鍵を解いた。

太い木枠の格子戸じやくしとで、結構勿体ぶつた雰囲気の扉である。まあ、その方がありがたみがあると言うものだ。愛子が横に引くと、扉は

ガラリと重い音を立てて開いた。

「さ、どうぞ」

愛子が促すと、佐島は頷いて中へ入った。扉の内側は、四畳半ほどの玄関になつており、壁には扉の無い、棚のような下駄箱がしつらえてあつた。下駄箱と反対側の壁には、觀音開きの扉がある。

愛子がその扉を開けると、薄手の四角い座布団が積んであつた。公民館なんかにおいてある、合成皮で出来た、安物の座布団だ。愛子は、それを一枚抜き取ると、佐島に渡しながら言った。

「じゃあ、姉を呼んできますから、すみませんけど、中で待つていってもらえますか？これ、使ってください」

「ああ、そうさせていただこう。お嬢ちゃん、すまないね」

佐島は、笑つて言うと、脱いだ靴を下駄箱にキチンと入れ、渡された座布団をもつて、神殿へ入つていった。佐島が待たされたのは、十分くらいのものだつた。

祭壇の前で、舞子と佐島が向かい合つてている。二人の間には、折りたたみ式の、小さなちゃぶ台が置いてあり、愛子が持ってきたお茶が二つ、その上で湯気を上げている。

舞子は、赤いミニスカートに、薄いピンクのTシャツ。薄手の、白いカーディガンを羽織つている。右手首に、赤いマガ玉のブレスレットをしていた。

その舞子の右斜め後ろに、巫女衣装に着替えた愛子が、神妙な顔で座つている。

舞子は、佐島に渡された名刺に、目を落としている。佐島の眼は、舞子の右手首のブレスレットに、釘付けになつていた。

紅蓮珠。悪鬼も逃げ出す、靈能法具である。どれほど力を持つているのか、佐島も知らない。

「天真教の、支部長さんですか。で、今日は、あたしにどんな御用でしようか？」

「私は職業柄、色々な方のご相談に乗らせて頂くことが多いのですが……」

「信者さんの、ですか？」

「いいえ。信者とは、限りません。むしろ、信者以外の方のほうが多いんです」

「どうしてですか？悩みをもって、宗教に頼る人が、多いんじゃないですか？」

愛子が、口を挟んだ。佐島は、愛子に微笑みかけ、話を続けた。「信者からの相談事は、ちゃんと係りの者がおりまして、対応しております。まあ、もちろん、私が直接伺うこともありますが」

佐島は、一口お茶を啜^{すす}つた。

「舞子さんには、お分かりとりますが、宗教というのも、結局は商売なのです。心の安定というものを売っている」

「思い切った事を、いいますね。まあ、神社も似たようなところはありますわ。商店会や、婦人会から寄付をいただいたり」

「もちろん、金儲けだけでやっているつもりは、ありません。宗教が、拠^{よき}り所になつて、救われている人も、大勢いますからね。話が横道にそれました。じつは、うちの支部の、あるスポンサーに泣きつかれまして」

お茶は、もう冷めていた。佐島は、湯のみに残っていたお茶を、飲み干した。

「今から、一ヶ月ほど前のことなんですが、その家のお嬢さんのヒザに、デキモノが出来たのです」

「デキモノ？」

愛子が、佐島の湯のみに、急須^{きゅうしょ}のお茶をついでやりながら言った。

「ええ。最初は、豆粒くらいだったのが、一日で、ゴルフボールくらいの大きさになりましたね。で、医者に診せたら、原因が分からないと。切つて、膿^{うみ}を出そうとしたんですが、血しかでなかつたんです。で、塗り薬をもらつて、その日は帰つたらしいんですが」舞子は、冷めてしまつた自分のお茶に手を伸ばし、黙つて聞いている。愛子が、いつの間にか、舞子に並んで座り、話に聞き入つていた。

「その日の夜、薬を塗ろうとした時、その『キモノ』が、喋ったんです」

愛子の顔が、引きつった。舞子は、涼しい顔で、冷えたお茶を口に含んだ。

佐島の話は、こうだつた。

少女の名前は、佐伯恵理香さえきえりか。中学二年生。その夜、薬を塗ろうとした時、『キモノ』がパックリと割れ、まるでカエルの顔のようになつた。そして、こう言った。

「無駄、無駄。そんなもので、俺を消そうなんて」

少女は、悲鳴を上げ、駆けつけた母親に、今起こつたことを話したが、『キモノ』は、もうただの『キモノ』で、母親には信じてもらえなかつた。

母親が出て行き、また一人になると、『キモノ』はまたパックリと口を開けて、喋り出す。

「誰も、信じるもんか。お前の頭が、おかしくなつたと思われるだけさ。ケケケケケ」

それ以来、昼夜ちやうやを問わず、恵理香が一人になると、『キモノ』が喋りだす。そして、少しずつ大きくなり、今はソフトボールほどの大きさになつてしまつた。

一度、手術で取つてしまつたが、その日の夜に、元の大きさに戻つていた。

「無駄と分からせる為に、一度だけ手術させてやつたのさ。もう一度、同じ事をしたら、今度は、ヒザじゃなく、顔に出来てやる。それでもいいなら、何度でも医者に切らせてみなよ」

そう言われてからは、もう親が何を言つても、医者に行こうとしなくなつてしまつた。そのうち、『キモノ』は、時々女の子の声で喋るようになった。

「気分はどう、恵理香?どうして、自分がこんな目に遭つのかつて、悲しくならない?あたしも、毎日思つていたわ」

恵理香は、髪の毛が逆立つ思いがした。

木下綾乃。^{きのしたあやの} 惠理香が、中学一年の時、数人でイジメのターゲットにしていた、クラスメイトだ。二年になってから、不登校になつている。

別に、大した理由があるわけではなかつた。それどころか、元々は小学校からの友達だつたのだ。

きっかけなどは、忘れてしまつた。自分がむしゃくしゃしている時など、絶好の気晴らしであつた事は、間違いない。

リーダーを、隠した。体育の鉢巻も、隠した。掃除の時間に、水の入つたバケツを、^{つまづ} 蹤いた振りをして、ぶちまけた事もある。靴に画鋲を入れ、教科書を焼却炉に捨て…。イジメは、どんどんエスカレートしていった。

はじめは、突つかかつてくる綾乃に、余計にムカついて虐め、後の方は、段々くじけて抵抗すらせず、ただ怯えた眼で自分を見る綾乃にイラついて、虐めていたようと思う。

「楽しかつたでしょ？ 一人の人間の人生を、台無しにするのって。あたしも、楽しませてもらうわ。あなたの人生を、台無しにするのをね」

そういうつて、デキモノはゲラゲラと笑つた。惠理香は、謝つた。綾乃に対する、謝罪の気持ちより、恐怖が先に立ち、泣きながら謝つた。

「駄目、駄目、駄目。あの時、あたしが謝つたら、あんた許してくれたの？ あんたの気が狂つたら、あたしはゆつくりと大きくなつて、あんたを取殺してあげるわ」

そう言つうと、再び男の声で、ゲラゲラと笑つた。木下綾乃の呪いだと言つたところで、何の証拠もなく、このデキモノは、第三者の前では、全くただのデキモノになつてしまつたのだ。

惠理香の心を絶望が支配し、惠理香は、自分の部屋へ引きこもつてしまつた。

それからも、デキモノは、恨み言と、ゲラゲラという笑い声を交互に吐き出した。惠理香は、電気も点けず、薄暗い部屋のベッドに腰

掛け、ただそれを聞いていた。

眼の焦点しょくてんが、合っていない。母親が、食事に呼んでも自分の部屋から出てこず、仕方なく部屋に食事を運んでも、ほとんど手をつけなかつた。恵理香は、日に日にやせ細つていった。

「その子の父親、佐伯誠さえきせいいち」という人が、私に相談に来たのが、三日前なのです。そして、私は、その子と会いました。その子の部屋で、二人だけでね」

そのときの話を、佐島は始めた。

一階の、恵理香の部屋へ行く前に、佐島は恵理香の両親に、決して一階へ上がって来ないように念を押した。

薄暗い部屋で、ベッドの上に座つていた恵理香は、部屋に入つてきた佐島に、無関心な眼を向けただけだつた。

「恵理香ちゃん、こんばんは。私は、佐島と言います。ちょっと、ヒザを見せてもらえるかい？」

佐島の言葉に、恵理香は身構えた。先ほどの、焦点の合つてない眼ではない。怯えた、ケモノのような眼だった。

「怖がらなくて、いいよ。ここで、なにかしようつてんじやあないんだ。見せてもらえば、君を助けてあげられるかもしれない」

そのとき、ふいにゲラゲラと、部屋に下品な笑い声が響いた。

「お前、靈能者か。クックク…。無駄、無駄、無駄。お前程度の靈能者が、俺をどうにか出来るつてか？」りやあ、面白い。お手並み拝見と、行こうじやねえか」

恵理香のヒザが、勝手に立ち、スカートからはみ出していた。ソフトボール程の大きさのデキモノが、パックリと口を開けて喋つている。

眼らしき切れ目まであつた。瞳ひとみの無いその眼で、デキモノは佐島を見ていた。力エルの顔の様に見えた。

佐島は、思わず顔をしかめた。強烈な、妖氣である。人面腫じんめんしゅ。明らかに、誰かの呪術によるものである。それも、これほどの呪術が使えるとなると、並の靈能者ではなかろう。

下手に、お祓いなどで封じ込めようとするが、かえって悪化するかもしだれず、恵理香の身が危険になるかもしだれない。

佐島は、持っていた鞄から、和紙と筆ペンを出した。筆ペンは特製のもので、四十八日間、自らの読経で清めた墨と塩を、混ぜたものが入っている。

そのペンで、和紙に手紙を書き、紙飛行機を作つて術をかけ、恵理香の部屋の窓から、空へ向けて飛ばした。

「それって、『返し矢』みたいなもの？」

また、愛子が口を挟んだ。

「とんでもない！相手は、私など足元にも及ばない、靈能者に違いない。そんな事をすれば、その矢は確実に私自身に跳ね返つてきますよ」

「それは、懸命な判断ですね」

舞子が、クスリと笑つて言った。

「で、手紙には、何て書いたんですか？」

愛子が、身を乗り出して聞いた。

「どこの、どなたか存じませんが、直接会つて、話がしたいと。その子の通り、中学校の屋上で、一人だけで会つてもらいたい、と書きました。で、やつて來たのが…」

「天海法師」

そう言つた舞子を、愛子がビックリした顔で見た。口が、あんぐりと開いている。

「なぜ、分かつたのですか？」

佐島も、驚いて聞いた。

「人面腫なんて呪術、使える靈能者は、あまりいませんからね。まあ、全国的になら、何人か心当たりはいますけど」

舞子が笑つて言った。

「天海法師は、言いました。自分と、張り合える靈能者にしか、術を解くことは出来ないと。お願いです。その子を、助けてやつてもらえませんか？私が、その子の親からもらつた、相談料と成功報酬

は、そつくりお渡しします。」

佐島は、ちやぶ台に乗り出すよじこして、舞子に詰め寄つた。

「わかりました。あたしたちが、やります。ただ、佐島さんにも、いくつか協力して欲しいんですけど」

「もちろんです。私に出来ることなら、なんでもやります。…つきましては、言いにくいんですけど、もう一つお願ひが…」

佐島は、バツが悪そうに切り出した。

「何ですか？」

聞いたのは、愛子だつた。舞子は、佐島が何を言い出すのか、すでに見抜いている顔だ。

「報酬を、全てお渡しするのは、当然の事なんですが、お祓いに成功したのは我々（われわれ）、つまり天真教と言つことに、していただけませんか？」

佐島の囁々しきに、愛子はまたまたあんぐりと、口を開けて絶句した。

「いいですよ。まあ、色々ありますからね」

「ありがとうございます！」

佐島は、舞子の両手を握つて、叫んだ。声にビックリした愛子が、のけ反つた。

「その、佐伯さんと言う人は、色々顔が広い方でして、私どもが何も出来なかつたとなると、どんな評判が広まるか、分かりません」

「じ…じゃあ、それも含めて、打ち合わせしましょう」

さすがの舞子も、佐島の勢いに少したじろいだ。愛子は、目をパチクリさせて、二人を見ていた。

「天海法師つて、葵ちゃんのことよね」

佐島が帰つた後、舞子の部屋のベッドに腰を下ろして、愛子が言

つた。舞子は、机の椅子に座り、背もたれに背中を預けていた。

汐海葵。舞子と同じ、中学一年生。舞子の、幼馴染である。母親は、汐海聖子。日本一有名な、靈能力者だ。

テレビ番組に引っ張りダムで、心霊写真の解説をしたり、霊能力で占いをしたりする。霊能者というより、芸能人に近い。

解説は、結構いい加減で、その場の雰囲気に合わせて、ちょっといい話や、怖い話をでっち上げている。占いも、あやふやで、どうにでも取れるような事しか言わない。

それでも、人気があるのは、時々完璧な占いをやったり、先祖の靈から、その家の家人しか知りえないはずの事を言い当てたりするからである。

それも、そのはず。汐海聖子は、実際に超一級の霊能者である。テレビでは、わざとそれを隠しているのだ。

その母親を、はるかに凌ぐ霊能力を持つているといえば、葵がどの程度の霊能者か、察しは付くだろう。

「葵ちゃんなら、話は早いね。行つて、事情を話せば、術を解いてくれるよ」

「さあ、どうかしら？」

「え？ 何よ、それ？」

「人面腫って、恨みが全く無いと、術にならないのよ。だから、葵じゃあ解けないかもね。木下綾乃っていう子の、呪いを解く必要があるんじゃないかなー」

「とにかく、葵ちゃんの所へ行つてみようよ。でないと、木下綾乃つて子の家も分からないじゃん」

舞子は、背もたれにさらに深く寄りかかり、両足を机の上に投げ出した。ちょっと、何か考える顔をしている。

「あんた、一人で行つておいで」

「え？ どうして？」

舞子は、机から足を下ろし、椅子ごとクルリと、愛子に向き直つた。

「あたしが行くと、あの子ちゃんとイジワルしたくなるかもよ。退屈しのぎに、あたしと腕比べ、なんて事になるかも知れないでしょ？」

なるほど、葵なら言ひ出しあつたな氣もある。

「分かつたわ。あたしが、行つてくる」

結局、愛子が一人で行く事になつた。

愛子は、舞子のベッドの枕元に置いてある、電話に手を伸ばした。葵の携帯電話の番号を、呼び出した。

「はい、もしもし」

一回のホールで、葵が出た。

「葵ちゃん？ あたし」

「なんだ、愛ちゃんか。そろそろ、舞子からかかってくると思つてたんだけど。なにか、用？」

どうやら、葵にはお見通じらしい。愛子は、舞子の方へ顔を向け、肩をすくめてみせた。

「へへへ。葵ちゃん、今からちょっと、会えない？」

愛子はわざと、少し下卑げびた言い方をした。

葵は、一瞬言葉を切つたが、やがて明るい声で言った。

「いいわよ。あたしが、行こいつか？ それとも、愛ちゃんが来る？」

「あたしが、行つてもいい？」

「いいわ。でも、夕食は？」

「食べてから、行くわ」

「まだなの？ あたし、今からぱざでも取ひりと思つてたんだけど、一緒に食べない？」

「食べる、食べるーじゃあ、今から行くね」

愛子は、電話を切ると、舞子の方を見て、ニタリと笑つた。

「そういう事だから、夕食は『自分でお願いね』

愛子は、スキップで部屋から出て行つた。今日せ、愛子が夕食当番だったのだ。

「ちえつー覚えてろ、チビ」

舞子は、愛子が出て行った部屋の入り口に向かつて、『イーだ』をした。

御神楽駅から、電車で一駅目。護符駅前の、一等地にそのマンションは、建つてゐる。スカイピア。オートロックの、玄関。横に付いたパネルで、葵の部屋を呼び出す。

「はーい。愛ちゃん？今、開けるね」

オートロックの扉のかぎが、音を立てて解けた。一流ホテルの、フロントのようなロビー。

愛子は、エレベーターに乗り、最上階である二十一階のボタンを押した。最上階は、ワンフロアしか無い。つまり、葵の住んでいる部屋しかないのだ。

エレベーターを降りると、短い廊下があり、マンションの中とは思えない、門がある。

「ここへ来ると、いつも思うけど、芸能人って儲かるんだなあ」愛子は、独り言をつぶやくと、門柱に取り付けてある、インターホンのボタンを押した。

「いらっしゃい」

インターほんからの返事ではなく、いきなり葵が、玄関を開けて顔を出した。

「こんばんは」

「こんばんは。さ、入つて」

廊下の突き当たりの、二十畳はありそうなリビングに通された。

八人掛けの、大きなダイニングテーブルに、大きなピザと、缶コーラが一本、用意してあつた。それが、なんとなく寂しい感じがした。

「おばさん、今日も仕事なの？」

「ママ？まあ、売れつ子だからね。そんな事より、座つて食べようよ」

「わーい。いただきまーす！」

愛子は、ことさらに嬉しそうに言った。葵は、母と一緒に暮らしながら。

「話つて、なあに？まあ、大体分かるけど」

ピザを、半分ほど食べた頃、葵が切り出した。愛子は、口にほお

ぱったピザを、コーラで流し込んだ。そして、葵に真直ぐ向き直つて、言つた。

「葵ちゃんが掛けた、人面腫の術の事よ」

「ストレートに、来たわね。まあ、とほける氣も無かつたんだけど。で、どうして舞子が来ないの？佐島は、舞子に相談しに行つたんじゃないの？」

葵は、もう一切れ、ピザに手を伸ばした。

「だつて、お姉ちゃんが来たら、葵ちゃんライバル意識出さない？もし、葵ちゃんに敵に回られると、恵理香つていう子を助けるのが、かなり難しくなるつて」

「舞子が、言つたの？」

愛子は、こくりとうなずいて、ピザに手を伸ばした。それを見て、いきなり葵が、声を上げて笑い出した。

「どうしたの、葵ちゃん？」

驚いた愛子が、眼をパチクリさせて聞いた。

「さすが、愛ちゃん。駆け引きもクソもないわね。そんなに正直に出られちゃあ、イジワルなんて出来ないわ。まあ、今回はそんなつもりは、全然無かつたんだけどね」

「だつて葵ちゃん、自分と張り合える、靈能者をよこせつて言つたんでしょ？靈能関係者に、そんなこと言えば、お姉ちゃんの所に来るに、決まつてるじゃない」

「だつて、そうさせよつと思つて、言つたんだもん」

「やう言つて、葵はピザをかじつた。

「どうこいつこと？」

「ひつこいつことよ」

葵は、今から一ヶ月ほど前の話を、始めた。

葵が、自分の母親である、汐海聖子のホームページ『聖子の館』^{せいこ}_{やかた}をのぞいていたら、ちょっと気になる書き込みを、見つけた。

『汐海先生、あなたを恨んでいます』

一行だけのこの文が、葵は妙に引っ掛けた。ファンのメールば

かりではなく、嫌がらせや、占いの通りにしたが、駄目だったとか言つ、苦情のようなメールも、沢山入る。

しかし普通は、何がどう駄目だったのか書いてあるし、文句や悪口も、ツラツラと沢山並べているものである。

どうしても気になつた葵は、母に代わつて、返信メールを送つてみた。

『恨む前に、何があつたのか、相談してくれないかしら？どんな悩みか知らないけれど、必ず解決してあげるわ。もちろん、無料よ。

『先生のメール、見ました。本当に、助けてくれるの？靈能力なんて、あたし信じていません。先生に、何が出来るって言うの？あたしは、死にます。先生の看板なんて、あたしには、関係ありません』たつた一行の文章。それに対して、返事を送ると、この食いつき方。しかも、文章もチグハグで、メールの活字越しに見ても、ヒステリックに叫んでいる様子が、想像出来る。

これは、かなり切羽詰つた状態だと、葵は思つた。

『いいわ。解決出来なきや、あたしも一緒に死んであげるから、会つて話しましょう』

そして、二人は会つことになつた。出かけて行くのは、聖子ではなく、葵だが。

指定されたのは、なんと護符駅構内にある、ハンバーガーショップだつた。まあ、後で聞いたら、汐海聖子が護符駅近くに住んでいる事は、テレビか何かで知つていたらしい。

自分が、先生を見つけるからと、自分の特徴はもちろん、年齢すらも告げられていなかつたが、その少女を見つけることなど、葵にとっては容易いことである。おそらく、体から強烈な思念を発しているだろう。

ハンバーガーショップに入つて、すぐに葵には分かつた。一番奥の席で、異様な眼で入り口辺りをにらんでいる少女。葵と、同年代である。

葵は、そ知らぬ顔でトイレに入った。そして、小さく呪文を唱えた。

「オン メメコ ハイロン ボウゲ ソワカ」
招呼呪法。しばらくすると、少女が、トイレに入ってきた。葵を見

見て、驚きの声を上げる。

「せ、先生！ いつの間に、ここに？」

少女の目には、葵が汐海聖子に見えていたのだ。眼の焦点が、合つていない。

「あたしは、有名でしょ？ あまり、人に見られたくないのよ。どう、お嬢さん？ あたしの部屋へ来ない？」

葵が言うと、少女は素直に頷いた。

葵の部屋へ、入つてから、葵は少女の顔の前で、両手をパン！ と叩いた。少女の眼が、ハツと我に返つた様に、焦点を取り戻した。

「あ、あなた誰？ 汐海先生は、どこへ行つたの？」

「まあまあ、落ち着いて。あたしは、汐海聖子の娘。葵って言つてヨロシクね」

葵は、ニッと笑つて敬礼の格好をして見せた。
「確かに、今まで先生と話していたはずなのに」

「それも、今から説明するわよ」

少女は、急に怯えた眼になり、葵の部屋を見回した。

ごく、普通の女子中学生の部屋である。天井に吊るされた、オウム用の小さなブランコに、銀色のコウモリがぶら下がっているのを除いては。

「キヤツー！」

「ウモリを見て、少女が小さな悲鳴を上げた。葵の式神、『羽丸』である。

式神。高度な靈能者のみが操る事が出来る精霊で、様々な形をしている。

「大丈夫。噛みつきや、しないわよ。ちょっと、待つてね」

葵は、一度部屋から出て行き、缶コーラを一本持つて、すぐに戻ってきた。一本を、少女に渡す。

「直接、缶から飲んでね。さ、少しリラックスしなよ」

「コーラを受け取り、少女は木下綾乃という名を、初めて名乗つた。それから綾乃是、一時間ほど、自分がどんなイジメを受けて来たか、喋り続けた。

それは、葵が思わず顔をしかめる内容だつた。

しかも、『汐海流占星術』という、葵の母が書いた本を、信じる信じないが、イジメに遭い始めたキッカケだつた。

佐伯恵理香は、小学生の時からの友達だつた。中学校に上がつても、二人は同じクラスになつた。やはり、二人は仲がよかつた。

一学期の、秋の遠足。綾乃是、直前で風邪をこじらせ、学校を二週間休んだ。

半月ぶりに、学校へ着てみると、恵理香は新しいグループに入つていた。

綾乃是、もちろん普通に話す。でも、班わけや、休み時間の行動等は、新しいグループを優先した。

綾乃是、なんとなく、孤立してしまつた。

ある日の帰りみち、綾乃是テレビで人気の霊能者、汐海聖子の『汐海流占星術』という本を、立ち読みした。これが、なかなか面白い。

綾乃是、本を買って帰り、夢中で読んだ。

次の日も、学校で休み時間に読んでいると、何人かのクラスメートが、興味深げに寄つてきた。

「でも、汐海聖子って、偽霊能者なんでしょう？」

言つたのは、恵理香だつた。

「だつて、テレビでやつてたよ。霊能者の、予言や占いなんて、後からどうにでも取れることしか言わないって新しいグループに入つてから、自分からは寄つて来なくなつたくせに、どうしてそんな事だけ、わざわざ言いにくるの？」

さすがの綾乃も、頭に來た。

「なによ、恵理香。そのテレビだつて、信用できるかどうか、分か

らないじゃない。大体、あんたに見せようと思つて、持つてきたんじゃないわ。あっちへ行つてよ」

綾乃と、恵理香がにらみ合つた。険悪な雰囲気に、他のクラスメートはいつの間にか、周りから離れて行つた。

「なによ、木下さん。そんな言い方、無いでしょ」

「そうよ。あたしも見たわ、そのテレビ。そんな本、信用出来ないわよ」

新しい恵理香の友達が、一人やつて来て、三対一で向かい合つた。綾乃が、何か言い返そうとしたとき、チャイムが鳴つた。

イジメが始まつたのは、翌日からだつた。

「内容聞いてて、あたし本氣で腹が立つちやつてさ。ひど過ぎると思わない?」

確かに、そのイジメの陰険さには、聞いている愛子も腹が立つてきた。

「で、人面腫の術をかけたのね。で、葵ちゃん、もう少しうん解けるんでしょ?」

愛子が、まだ残つてゐるピザに、手を伸ばしながら言つた。

「無理ね。術をかけているのは、綾乃自身なんだから。無理やり解くつもりなら、術を返すしかないわ」

「術を返すつて、そんなどこしたら、綾乃つて子の命に係わるじゃない! 出来ないわよ、そんな事。葵ちゃん、そのいじめつ子を、本気で殺すつもり?」

愛子が、口にほおばつたピザを撒き散らしながら、葵に食つて掛けた。

「汚いなあ、愛ちゃん。いくら何でも、殺すつもりなんて、無いわよ。人面腫の術つて、恨みが無けりや、効かない術なの。つまり、恨みが強いほど、術の効果も強いつてワケ」

葵が、「コーラを一口飲んで、続けた。

「だから、ある程度相手が苦しんで、降参しちゃえば、人間の恨みなんて、ある程度治まっちゃうものなのよ。そしたら、人面腫は勝

手に消えちゃうはずだつたんだけビ

「その、綾乃つて子の恨みが、よほど強かつたつて事ね」

「やつじうこと。あたし個人としては、元々恨まれる原因を作つたのはソイツなんだから、殺されたつて、しうがないと思うんだけどね」

葵は、平然と言つた。自分がなんとかする気は、無いらしい。

「そんなに、睨まないでよ、愛ちゃん。もしかしたら、イジメが原因で、綾乃が自殺してたかもしれないんだから」

「自殺も、本人の責任でしょ？ 負けても戦い続ければ、イジメなんか跳ね返せるはずよ」

葵は、フッと悲しそうな顔になつた。手にもつたコートを、コートと音をたててテーブルに置いた。

「戦えないから、いじめられるんだよ。イジメに遭つてる子に、強い子の理論なんて、どんなに正論でも、説得力はないのよ」

愛子は、胸に杭を打ち込まれたような気分になつた。確かに、葵の言つ通りかもしれない。

「そ、愛ちゃん。話はおしまい！」

二人の間に、一瞬流れた暗い空気を、振り払つよつて、葵は急に大きな声で言つた。

「これ、木下綾乃の住所。今回は、ごめん。後、ヨロシクねー。」

「二つと笑つて、愛子にメモを渡した。

「どうやって、木下綾乃の住所を聞き出そうか、悩んで損しちやつた。最初つから、お姉ちゃんに言えれば、よかつたじゃない」

「言つたでしょ？ あたしは、ソイツを助ける気が無いって。佐島が、舞子のところへ行かなきや、アウトだつたつてこと」

「そりや、そうだ。愛子は、肩をすくめた。

助ける気があるなら、こんな回りくびこことをしなくて、葵ならどうでも出来るだらう。

木下綾乃の住所は、町外れの団地だった。三棟が、ドミノのよう

に並んで建つてゐる。お世辞にも、ゆうふく裕福そうには見えなかつた。

団地の西側の壁に、夕日が当たつて、綺麗なオレンジに染まつてゐる。棟と棟の間にある、小さな公園では、まだ何人かの子供たちが遊んでいた。

「うん。お姉ちゃん、あの一番右の棟だよ」

愛子が、葵にもらつたメモを見ながら言つた。

「確か、四階よね？ まつたく、エレベーターくらい、付けて欲しいわよね」

言つてから、舞子は溜息ためいきをついた。

「何言つてるのよ、若者が。ツベコベ言わずに、上の」

「年下のくせに、年寄り臭い事、言わないでよ」

一人は、公園を横切り、一号棟の前で、もう一度メモを見た。棟の正面に立つと、階段が三箇所あつた。左。真ん中。右。

「四〇一号室。お姉ちゃん、一番左の階段だよ」

「はいはい。参りましょ」

四〇一号室。青いペンキの剥げかかった、鉄のドア。プラスチックの、写真入れの様な表札に、『木下』とだけサインペンで書かれた紙が、入つていた。

インターホンは、無い。チャイムのボタンを、舞子が押した。ドアの向こうで、ピンポーンといつ、オーソドックスな音が聞こえた。中で、誰かがドアに近づく気配がした。

「はい。どちら様ですか？」

綾乃の、お母さんらしく。

「すみません。学校のプリント、届けにきたんですけど、綾乃さん居ますか？」

舞子が、いかにも女子中学生です、と言つてみつた声で言つた。愛子が、ゲッという顔で、舞子を見た。

力チャリと、鍵が外れる音がして、ドアが開いた。ちょっと、疲れた感じのお母さんが、顔をのぞかせた。眼に、敵意を感じる。「これ、お願ひします」

舞子は、にっこり笑つて、一枚の紙を差し出した。

お母さんが、紙を受け取つたとたん、舞子が手刀ですばやく宙を

切つた。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前」

お母さんが、驚いて舞子を見た。

「オン キリキリ オン キリキリ キヤクウン」

舞子が、手のひらを突き出すと、お母さんは、驚いた顔のまま、まるで瞬間冷凍されたように、その場で固まつた。

舞子は、愛子の襟首をつかむと、部屋の中へ引き入れた。

「金縛りの術？なんてこと、するのよ」

愛子が、とがめるような眼で、舞子をにらんだ。

「いいから、あんたは誰も入れないよ！」に、結界張つてから、入つておいで」

舞子は、靴を脱いで上がり込んでしまつた。

愛子は、なにやらぶつぶつと文句を言いながら、それでも手に持つていた手さげから、札を一枚取り出した。

ドアに貼り付け、呪文を唱える。

「オン トナトナ マタマタ カナカナ カヤキリバ ウンウンバ
ツタソワカ」

これで、誰かが尋ねて来ようとしても、この部屋のドアに、たどり着けないだろう。愛子は、会社から帰宅した綾乃のお父さんが、迷子になつてその辺をさ迷い歩かない事を、祈つた。

上がり込むと、すぐそこにはキッチンだつた。その奥に、襖があるが、舞子が開けたのだろう、開きっぱなしになつている。綾乃の、部屋だらう。

「わっ！お姉ちゃん、何やつてんの！」

愛子が部屋へ入ると、窓際に置かれた勉強机の椅子から、一いちを向いて立ち上がりかけた格好で、木下綾乃が固まつていた。

出入り口の所で、綾乃の弟とおぼしき小学生も、一緒に固まつていた。

「木下綾乃に会う方法は、任せろっていうから、どうやるのかと思つたら。これじゃ、強盗じゃない」

「うるさい！ 何も、取りやあしないわよ。いい？ 学校で、イジメに遭つて、引きこもりになつている子の家族だよ？ 同じ女子中学生の話に、聞く耳なんて持つてくれないわよ」

まあ、確かに一理ある。

「それに、あたしたちの記憶なんて、消しちゃうんだから、入り方なんてどうでもいいの。それより、さっさと終わらせるわよ」

確かに、今言い争つていてる場合ではなかつた。二人で、固まつた綾乃を畳に寝かせた。

「佐島さん、うまくやつてるかなあ」

「もう、始めているわ。さ、あんたも用意しな」

愛子は、手さげから金の横笛を取り出した。

雷笛。笛の音に込められた、吹き手の念を増幅させる力を秘めた、
霊能法具である。

もちろん、誰にでも吹けるシロモノでは無い。よほど名手が吹かなければ、音が出ないのだ。愛子は、自分以外で雷笛を吹ける人間を、見たことが無かつた。

舞子は、上着のポケットから、半分にちぎれた札を取り出し、綾乃の額に貼つた。小さなビンから、塩を取り出し、綾乃の口に一つまみ入れた。

しばらく黙もくとした後、左手の人指し指を、右手で握り、右手の一指だいちし指さしを、カギの形に曲げて、印を結んだ。ちけんいん智拳印と呼ばれる、
大日如来の印である。

「アシヤアシヤ ムニムニ マカムニムニ」

舞子は、ゆっくりと、呪文を唱え始めた。

「アウニキユウキユウ マナカナキユウキユウ トウカナチ [...]」

綾乃の表情が、苦しそうになつてきた。

「アカナチアタナチ アダアダ ナダナダ」

「うう...」

綾乃は、ついにうめき声を、もらし始めた。

「うう、うう…。う…。ゲハハハハ！」

綾乃是、急に男の声で下品な笑い声を上げた。

「貴様きさま、靈能者か？俺様おとこさまを、祓ほいに来やがつたのか。帰れ帰れ！コイツを、殺すつもりか？」

綾乃是、首を不自然に曲げ、顔だけを舞子に向けていた。体は、金縛りで動けない。

その顔には、深いシワが刻まれ、眼が吊り上つて、綾乃の顔には見えなかつた。

「リュウズリュウズ キュウキュウズリュウ キニキニキニキニ…」「やめろ！俺は、「コイツの心なんだぞ！俺を祓えば、コイツの心もこわれちまうんだぞ！グ…。グウ…。グアーーー！」

愛子が、雷笛おとに唇を当てた。

澄んだ、音。金色の、絹糸きぬいとのように、柔らかい。その笛の音が、部屋一杯にあふれた。

舞子が、呪文を止めた。

綾乃是、固く眼を閉じて、苦悶くもんの表情を浮かべている。

なおも、愛子は吹き続けた。愛子が吹いているのは、綾乃が卒業した、小学校の校歌である。

綾乃の顔から、シワが消えていく。

「ガナハチイビナヤカ ガナハチイビナヤカ ガナハチイビナヤカ

…」

舞子も、違う呪文を唱え始めた。愛子の、笛の音と絡み合い、綾乃を優しく包んだ。

綾乃の顔から、完全にシワが消え、苦しそうな表情も、おだやかになってきた。

やがて、静かな寝顔になつた時、綾乃の閉じられた眼から、涙がこぼれてきた。

綾乃是、夢を見ていた。

小学校の運動場で、恵理香と一緒に、逆上がりの練習をしている。

三年生の時だ。

そう言えば、恵理香に補助をしてもらい、何度も手の豆を潰して、出来るよくなつたつ。

場面が、変わつた。綾乃の家で、遊んでいる。おもちゃの取り合いで、けんかになつた。

綾乃のお母さんが、スナック菓子の袋を一つ、おやつに出してくれた。

ひとつ袋に、交互に手を入れ、スナック菓子を食べた。いつの間にか、けんかの事は忘れ、笑っていた。

遠足。修学旅行。卒業式。中学に入つて、クラス発表を見たとき、手を取り合つて、同じクラスになれた事を喜んだ事。

恵理香との思い出が、アルバムをめくるように、よみがえる。

恵理香を、殺そうとするなんて。激しい後悔が、綾乃の胸をえぐつた。

傷ついた綾乃の心を、愛子の笛の音が優しく包み込む。綾乃は、暖かい涙を流し続けた。

恵理香の部屋には、物々しい祭壇が飾られ、壁中に護符が貼られた。佐島は、白装束で大きな珠数を持ち、汗にまみれて天真教の、ありがたい真言を唱えている。

もちろん、舞子と打ち合わせた、ただのパフォーマンスである。佐島は、恵理香と綾乃が卒業した、小学校の校歌のテープを手に入れ、舞子に渡した。

そして、お祓いの成功を天真教の手柄にするため、舞子たちと時間を合わせて、恵理香の部屋で、何やら儀式めいたマネをしていたのである。

祭壇の前には、恵理香が寝ている。ヒザの人面腫には、舞子から預かつた、半分にちぎれた札を貼つていた。

佐島が、お祓いをはじめた時、人面腫はただのデキモノだった。

しかし、しぶらぐすると、いきなりパックリと口を開き、喋りはじめた。

「貴様、靈能者か？俺様を、祓いに来やがったのか。帰れ帰れ！口イツを、殺すつもりか？」

佐島は、この台詞が自分に対して発せられたものではないことを、知っていた。舞子が、お祓いを始めたのだ。

恵理香は、しぶらぐ苦しそうな表情で、固く眼を閉じていた。

やがて、

「やめろ！俺は、「コイツの心なんだぞ！」俺を祓えば、「コイツの心もこわれちまうんだぞ！」グ…。グウ…。グアーーー！」

と、叫んだ人面腫と一緒に、恵理香も気を失ってしまった。

しばらくすると、閉じたままの恵理香の眼から、涙があふれ始めた。そして、まるで風船がしぶむように、人面腫は消えてしまった。

田の前のピザに、最初に手を伸ばしたのは、愛子だった。葵のマンションのリビング。恵理香の人面腫を祓つて、もう半月になる。

恵理香と綾乃は、以前以上に仲良くなつたらしい。

恵理香も、寂しかつたのだ。ちょっととした行き違いや、言いたい事を言うタイミングを逃したりして、人間関係は時として、とんでもない方向へ捻じ曲がってしまう。

「だから、あたしは仕事を回してあげた様なもんじゃない。本来このピザも、あんたたちのオゴリでいいくらいよ」

「よく言うわよ。感情に任せて、人面腫の術なんて使つとこで」

葵と舞子が、同時にピザに手を出した。

「でも、葵ちゃん。解決出来なきや、一緒に死ぬつて、綾乃さんと言つたんでしょう？解決出来なかつたら、どうするつもりだつの？」

ピザをほおばりながら、愛子が言った。

「そん時や、綾乃からあたしの記憶を消すだけよ。だつて、あたしのせいでも、ママの本のせいでもないんだもん」

そう言えば、綾乃もその家族も、舞子と愛子の記憶は無い。部屋

を出ると、葵や舞子が自分たちの存在を、綾乃たちの記憶から消した。

「でもまあ、あたしは恵理香なんて、助ける気もなかつたし、あん

たちが助けてくれて、寝覚めの悪い思いせずにするんだわね」

「めずらしく、感謝してるのでワケね」

缶コーラを一口飲んで、舞子が言った。

「もちろん。ねえ、舞子。あたしたちが、もしケンカにでもなつて、お互に恨みあつたりしたら、愛ちゃんがなんとかしてくれるから、安心よね」

「そうね。その時は、愛子に頼むか」

愛子は、飲みかけたコーラを、思わず噴出ふきだして言った。

「絶対に、ゴメンだからね！」

舞子と葵が、顔を見合させて笑った。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4990z/>

陰陽少女2

2011年12月16日22時46分発行